

《歴史文献》

## 『二十四史』及び『清史稿』の整理出版についての 答申報告書

中共中央弁公室

(陳 仲 奇 ・ 邱 燕 凌 訳)

はじめに

1. 『二十四史』の校点情況
2. 人員の招集と作業分担
3. 校点整理の作業方法
4. 『清史稿』の整理方法
5. 進度予想

毛主席の批示：同意。

### 『二十四史』及び『清史稿』の整理出版についての答申報告書

4月2日、総理、文元同志の『二十四史』と『清史稿』の校点整理に関する指示を、われわれはすぐに顧頡剛先生、上海の繩樹山同志と中華書局の関係者同志等に伝達した。29日、われわれはまた顧頡剛、王冶秋、白寿彝、高亨、許大齡等と上海の出版座談会に出席した責任者、中華書局の関係者を招き、一つの座談会を開いた。席上では、さらに総理、文元同志の指示を勉強し、それから、顧頡剛先生と中華書局の同志が提案した如何に中央指導者の指示を実行するか、の計画について意見を交換した。ここで、『二十四史』と『清史稿』の整理出版計画を報告する。

#### 1. 『二十四史』の校点情況

『二十四史』の校点事業は、1958年に始まった。文化大革命の前までの各史の校点情況はおおよそ以下の通りである。

すでに出版された四部：『史記』、『漢書』、『後漢書』、『三国志』。

すでに書型が完成段階にある三部：『南齊書』、『周書』、『陳書』。

校点済みで、校勘記を修正し終わるのを待って写植・印刷に出すことができる四部：『晋書』、『梁書』、『北齊書』、『隋書』。

校点済みで、一部が再校も終え、全書再校後、写植・印刷に交付することができる一部：『明史』。

大部分もしくは一部分を校点した十一部：『宋書』、『魏書』、『南史』、『北史』、『旧唐書』、『新唐書』、『旧五代史』、『新五代史』、『宋史』、『遼史』、『金史』。その中の『宋史』に関しては、別に聶崇岐による全文初点稿がある。

わずか一部分のみ標点した一部：『元史』。

1958年、中華書局が専門家に依頼して『清史稿』全書に句切りをし、校勘作業を行い、複製出版する予定であった。しかし、当時の整理作業におおざっぱなところがあり、また、底本の選択も不適切であったため、最終的にずっと出版に踏み切れなかった。

## 2. 人員の招集と作業分担

今回の校点整理事業は、基本的に元の基礎の上で継続することになる。まとめやすくするため、また、関係者同士が互いに研鑽しやすく、作業進度をあげるために、関係者を北京と上海の両地にそれぞれ集める。北京のほうは中華書局に責任を任せ、上海のほうは上海人民出版社に任せる。二つの校点グループを作って、それぞれ若干部分を担当し、史によって作業分担を分け、各自で行うことにする。目下、上海方面の同志と具体的な担当部分について相談を進めているところである。

作業の品質保証と体例の統一を図るために、各史ごとに一人のまとめ役を選出し、その人が最終的に再度全稿について目を通して確認する責任をもつ。各史の校点を終えた段階で、顧頡剛先生に総まとめ役として審査決定してもらった後、中華書局にその出版を一任する。

上海の人選は大体固まっている。北京は、約四十名必要となるが、これらの人は、一部分は元の文化部咸寧「五・七」幹部学校にいる中華書局の編集者の中から若干名を選出し、もう一部は全国各地から専門家を借りる。現在、われわれは元の校点人員と一部の適任者について調べているところである。各関連部門や職場に相談打診した後、名簿を決めて招集に掛かる予定である

## 3. 校点整理の作業方法

整理作業の重点は主に標点つけと段落分けに置く。各史の正文はみな段落分けをしなければならない。新しい標点符号を使用し、人名、地名、書名及び一部の官職名も専用符号で逐一表示する。標点はできるだけ正確さを求め、段落分けも原文の構造を保たせながら合理性を追及することに努める。

校勘は主に刻本の文字の奪誤、錯簡、増加、脱落等を校正する。歴史事実の異同と原書内部の矛盾点については、校正を行わないことにする。煩雑になることを避けるため校勘は異なる版本を交互に校正することを主とする。前人の校勘成果に対しても吸収するように注意を払わなければならない。原則上、“本校”（正史各部分を相互校正すること）と“他校”（関連書物により相互校正すること）は行わないが、しかし、確実に史実文字の脱落や錯誤があったため、標点がつけられず文脈が通じない、また、版本も校正のしようがない場合は、以上の方法を適切に採用することができる。類書とその他の史籍資料を参考にして底本を校正し、校勘記の中で説明を明記するようにする。

各史の校点を終えた後、重要な文字の異同について、簡単かつ実用的な校勘記にまとめ上げ、各巻或いは各篇史文の後ろにつける。校勘記は一律に白話文体を使用するが校勘学

用語の使用は禁じない。

現段階では、批判性のある序言を書くことには尚ある程度の困難があることを考慮し、各史の出版にあたり「出版説明」のみを書くことに決める。その内容は作者の生い立ちの紹介、撰修の経緯、版本の源流等各方面の基本情況と校点整理の過程における幾つかの技術的な説明のほかに、情況によって可能であれば各史の撰修の学術的实力や造詣、作者の歴史観についても簡単な批判的紹介をする。顧頡剛先生が「野史」を整理する意見を提出したが、参会者達は『二十四史』の整理出版を終えた後に、新たに着手することが望ましいと合意した。

#### (4)『清史稿』の整理方法

『清史稿』は、北洋軍閥時代に撰修されたもので、前後十五年に亘って書き上げたものが随時印刷され、総括的な審査校訂を行う責任者がいなかったため、全書には体例が統一されず、記述の詳略のバランスが悪く、古い志書に因襲し、錯誤が百出している。その中には、わが国と東南アジア諸国の国境については、はっきりと記述してあり、何山河をもって境界とするかを悉く明記してあるが、その信憑性について極めて疑わしいところがある。その上、朝鮮、ベトナム、ミャンマー、タイ、ラオス、インドネシア等をわが国の植民地として列挙し、侮辱的な記述が少なからず見られる。そのほかに、台湾のことを「古来、荒れた地であり、中国に通ぜず、名は東藩と称す。清順治十七年、海賊である鄭成功がオランダ人を追い出してそこを占領した……。康熙二十二年に清軍が討伐し、台湾府を設置し福建省の管轄に属す……。光緒二十二年に日本国に渡した。」（『地理志』十八）としているが、これらの観点は明らかに間違っているし、また、歴史の事実にも反しているのである。

『清史稿』には問題が多く存在しているため、如何に整理すればよいかは尚慎重に考える必要がある。多数の参会者は『二十四史』の整理方法に準じて整理印刷するという主張もっていた。

『清史稿』の初印本には、「関外本」と「関内本」の違いがある。「関外本」は初印の元本で「関内本」は朱師轍の手によって改正したものである。「関外本」に見られた錯誤が「関内本」にもほとんど存在しており、場合によっては「関内本」のほうがより錯誤が多いことが分かった。よって、今回の整理事業は「関外本」を底本として使用する。印刷する際、比較的詳細な説明を作り、版本の異同、撰修経過及び金梁に改ざんされたことを紹介したうえで、一つの正確な目録を作成する。

『清史稿』は問題が多いため、特に涉外と辺境問題がさらに顕著であることを考えて、将来出版する際、装丁に関しては『二十四史』と区別し、対外的には公開販売せず関連部門内で限定発行する。

#### (5) 進捗予想

われわれは、毛沢東思想の偉大な旗を高らかと掲げプロレタリア政治を強調してマルクス・レーニン主義や毛沢東思想を活用し、組織の指導力を強めさせ、二、三年以内に未出版の二十史及び『清史稿』を全部出版し揃える。

進捗予想は以下の通りである。

『南齊書』、『陳書』、『周書』の三史は、すでに植字に回しており、『出版説明』の書き直し或いは『出版説明』を補充した後、年内に印刷出版する予定である。

『晋書』、『梁書』、『魏書』、『北齊書』、『隋書』等五史は、校勘記を改めて来年に印刷出版する。

その他の十二史及び『清史稿』に関しては、1973年に出版できるよう努力する。

以上の報告内容の当否について、ご指示を伺いたい。

出版口指導グループ

1971年5月3日

春橋同志批注：

同意する。『二十四史』の整理に合わせて、国務院出版部門で中国歴史地図の出版作業にも取り組んでほしい。上海ではすでに一部の作業を始めていたが、困難が少なくない。

中共中央弁公庁

1971年5月14日

原文

毛主席批示:同意。

整理出版二十四史及《清史稿》的请示报告

四月二日总理，文元同志关于整理校点二十四史和《清史稿》的指示，我们及时向顾颉刚先生，上海的绳树山同志和中华书局的同志等作了传达。二十九日，我们又邀请顾颉刚、王冶秋、白寿彝、高亨、许大龄等及上海出席座谈会的负责同志，中华书局的同志，开了一个座谈会，进一步学习了总理，文元同志的指示，并就顾颉刚先生和中华书局的同志提出的如何落实中央领导同志指示的计划交换了意见。现将整理出版二十四史和《清史稿》的计划报告如下。

#### (一)二十四史校点情况

二十四史校点工作是从一九五八年开始的。到文化大革命前，各史校点情况大致如下：

已出版的有四部：《史记》、《汉书》、《后汉书》、《三国志》；

已付型的有三部：《南齐书》、《周书》、《陈书》；

校点完毕，待修改校勘记后即可付排的有四部：《晋书》、《梁书》、《北齐书》、《隋书》；

校点完毕，已复校一部分，全书复校后即可付排的有一部：《明史》；

校点过大部分或一部分的有十一部：《宋书》、《魏书》、《南史》、《北史》、《旧唐书》、《新唐书》、《旧五代史》、《新五代史》、《宋史》、《辽史》、《金史》，其中《宋史》

另有聂崇岐全部初点稿；

初步标点过一小部分的有一部：《元史》。

一九五八年，中华书局还请人将《清史稿》全书做过断句、校勘的加工，准备影印出版。但因当时整理工作做得比较粗糙，底本选择也不恰当，故一直没有出版。

## (二) 人員の組織和分工

这次整理校点工作，拟在原来基础上继续进行。为了便于领导，相互研讨，加快进度，决定抽调人员，集中到北京和上海两地。北京由中华书局负责，上海由人民出版社负责，组成两个校点组，各承担若干部，按史分工，分头进行。目前正与上海的同志就如何分工问题进行磋商。

为了保证质量，统一体例，要求每史均有一人负责最后通读复阅。各史校点完毕，由顾颉刚先生总其成，审查定稿后，统由中华书局负责出版。

上海的人员已初步安排就绪。北京需约四十名左右，这些人一是从原文化部咸宁“五·七”干校中华书局编辑中调回若干名，一是从全国各地借调。目前，我们正在对原来的校点人员和一些适宜搞这一工作的人进行调查了解，待与各有关单位协商后，再确定名单抽调。

## (三) 整理校点工作的方法

整理工作的重点主要放在标点、分段上。各史正文都要分段，用新式标点符号标点，人名、地名、书名及一些官名，也都用专名符号一一标出。标点要力求准确，分段要合理而不破坏文章结构。

校勘主要是校正刻本文字的讹、舛、衍、脱，对于史实异同和原书内部的矛盾则不作校正。为了避免烦琐芜杂，校勘以版本互校为主，对于前人校勘的成果也应注意吸收。原则上不作“本校”（本史各部分互校）和“他校”（用有关的书互证），但遇有确属史文脱误，以致点不断、读不通，版本又无从校正的地方，可适当采用这类办法。参考类书和其他史籍资料校正底本，并在校勘记里说明。

每史校点完毕后，将重要文字异同写成简明、适用的校勘记，置于每卷或每篇史文之后。校勘记一律用语体文，但并不排斥使用校勘术语。

考虑到目前写批判性序言还有一定困难，各史出版只写《出版说明》。内容除介绍作者生平、撰修始末、版本源流等方面的基本情况和整理校点当中一些技术性的说明外，根据可能，适当对每史撰修的功力，作者的历史观点，作一简要的批判的介绍。

顾颉刚先生提出要整理“野史”的意见，大家认为可以等二十四史整理出版以后再搞。

## (四) 《清史稿》的整理办法

《清史稿》是北洋军伐时期撰修的，前后将近十五年，随写随印，无人总阅，所以体例不一，繁简失当，因袭旧志，谬误百出。书中对我国和印度支那各国的边界，写得很清楚，说明以何山何水为界，是否可靠，很难尽信；而且将朝鲜、越南、缅甸、暹罗、老挝、印尼等列为我国的属国，并有不少侮辱性文字；又把台湾省说成“古荒服之地，不通中国，名曰东藩。清顺治十七年，海寇郑成功逐荷兰人，据之…康熙二十二年讨平之，改置台湾府，属福建省…光绪二十二年割隶日本”（《地理志》十八）。这些说法显然错误，也不符合历史事实。

因为《清史稿》问题较多，如何整理，需慎重考虑。参加座谈会的多数人主张按照二十四史一样办法整理、排印。

《清史稿》的初印本有“关外本”和“关内本”之分。“关外本”是初印的原样，“关内本”是经朱师辙抽换改动过的，“关外本”的错误，“关内本”也大都相同，有的地方“关内本”错误更多。因此，这次整理拟用“关外本”作底本。付印时写一较详尽的说明，介绍版本异同、

撰修经过及被金梁窜改的情况，并作一正确目录。

由于《清史稿》问题多，特别是涉外和边界问题更为突出，因此，将来此书出版，在装帧上和二十四史加以区别，不对外公开出售，只在有关单位内部发行。

#### (五) 大致的进度

我们要高举毛泽东思想伟大红旗，突出无产阶级政治，活学活用马克思主义、列宁主义、毛泽东思想，加强组织领导，争取在二、三年内将未出版的二十史以及《清史稿》出齐。设想大致进度如下：

《南齐书》、《陈书》、《周书》三史已付型，准备修改或补写《出版说明》以后，年内付印出版；

《晋书》、《梁书》、《魏书》、《北齐书》、《隋书》五史，修改校勘记，明年付印出版；其他十二史及《清史稿》，争取一九七三年出版。

以上报告当否，请指示。

出版口领导小组

一九七一年五月三日

春桥同志批注：同意。配合二十四史的整理，希望国务院出版口把中国历史地图的出版工作也能抓起来。上海已作了一些工作，但是困难不少。

中共中央办公厅

一九七一年五月十四日印发